



宣教師生活 50 年 感謝記念

# 日本の子どもの 救いのために

辛い少年時代を過ごした日本、  
「もう二度と日本の土を踏まない！」と宣言し、  
カナダに帰国した青年を日本に導いた神の摂理の御手

ひろすけ たなか  
フレドリック博輔・田中





## はじめに

私は、移民家族の二世として、1933年4月カナダで生まれました。そして1963年9月CEFの宣教師として来日しました。

私の人生で最大の出来事と喜びは、私の身代わりとして十字架上で死んで、三日目によみがえってくださった主イエス・キリストを、自分自身の罪とその永遠の刑罰からの救い主として信じ、心にお迎えすることによって、罪が赦され、救われた事です。

過去を振り返ってみますと、非常に残念で、悲しい思い出があります。それが、私が救われてからの50数年間、児童伝道に携わってきた大きな理由の一つです。

その過去にふれながら、私に児童伝道の召命を与え、日本宣教の道に導かれたご真実な主をあかしします。

最後になりましたが、50年の宣教生活を導き、支えてくださる愛する主と妻ジェイン、そしていろいろなかたちでご支援して下さる兄弟姉妹に、心から感謝します。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。

すべての事について感謝しなさい。

1テサロニケ 5:16-18

2013年9月

フレッド・田中

## ➤ 楽しかったけれども、 救いのない、希望もなかった教会時代

1933年4月9日、農家の5人目に三男として生まれた私は、4歳ごろから兄弟たちとともに、片道4.5kmもあった教会に通った。第二次世界大戦中、4年間の収容所生活中もほとんど休むことなく、忠実に通った。

しかし、10年間通っても、兄弟の誰一人、救われなかった。なぜだろう？

福音伝道がされていなかったのである。

福音伝道ができるもっともよい機会であるクリスマスには、救い主ではなく、サンタクロース、プレゼント、ストーリーや楽しい劇などだけ。イースターは、もっと悲しい。罪、イエスさまの血、十字架、復活の具体的な意味はほとんど語られず、たまごさがしなどゲーム中心のものしか、私の記憶には残っていない。

「おお主よ、教会が同じようなサタンの策略に陥らないよう、守ってください。」

### ★強制収容所へ

ジャパングアメリカと戦争をはじめた。ハワイのパール・ハーバー（真珠湾）の不意打ち爆撃だった。

そのニュースがアメリカ全土、カナダに瞬く間に広まった。ラジオも電気もない田舎百姓の田中家にも届いたのである。

私は、5人の兄姉たちと普段通り、3マイル(約4.8km)の砂利道を歩いて、田舎の2教室学校(1年生～3年生の1教室と4年生～8年生の1教室)に行ったが、校内の雰囲気が変わっていた。これまで暖かだったみんなのまなざしが、一変して冷たく感じられた。

あちらこちらでジャップ(日本人野郎)という言葉が聞こえるようになった。数人の友達以外は…昨日の友は、今日は敵…。

間もなく、政府から通達が来た。

「18歳以上の男性は全員、近日中に、緊急仮設住宅づくりに強制出動」と命じられた。各家庭は頼りになる男不在となった。不安が数か月続いた。

数か月後、土地、家、家財一切をあとに、手で持てるだけ持って、ロッキー山脈の山中へ。車で160km、さらにトラックの荷台ででこぼこ道を揺られ、収容所に到着。これから4年間住むことになる仮設住宅に入った。

ロッキー山脈の山中の小さな盆地は、冬には池や湖が一面20～30cmの厚さに凍りつき、雪もかなり積もった。屋根や歩道の雪かきをすると、歩道の横に2m以上の雪壁ができるほどだった。

そこは、大自然の恵みが豊かだった。山中ではいろいろな動物をこの目でみた。黒熊、鹿、狼、コヨーテ、山猫、山ヤギ、ウサギ、ビーバー、ミンク、スカンク等。川にはニジマス、ヤマメ等。マツタケ、多種のきのこ、ブルーベリー、ワラビ、フキ等、山菜、花や植物も多かった。

電気はなく、照明は灯油ランプ、ランタン、ローソク。  
暖房・炊事は薪ストーブだった。薪は定期的に届けて  
くれていた。

水は各家に外側一か所、パイプで引いた蛇口があっ  
た。川から引いていた水だったので、いつも特殊な布  
袋を蛇口に取り付け、なるべくきれいな水を使用する  
よう心掛けていた。凍結することも度々あり、防止策を  
考える必要があった。

トイレは外にあった。背中向き合わせの四件の家の  
空き地の中央にひとつ、四家族用の小屋があり、中は  
四つに仕切られていた。深い穴の上に人が座れるよう  
に板を張り、その真ん中に丸い穴が作られていた。寒  
い冬、悪天候、真っ暗な夜などはとても大変だった。

風呂場も洗濯場も家にはなく、100mぐらい離れた共  
同建物(約 50 家族用)が数か所あった。共同風呂は時  
間が決められていた。わんぱく小僧たち(私も)は一番  
風呂に入って、お湯遊びをして楽しんでた。

4 年間、豊かではなかったけれど、衣食住は保障さ  
れ、何の不自由もなかった。外部からの攻撃やそれに  
伴う精神的苦痛から逃れられ、守られていた。9 歳の私  
にとっては、たくさんの同人種の仲間(約 400 家族が  
いた)ができ、楽しかった 4 年間だったと言える。しかし、  
親たち、成人していく若者たちにとっては、将来性の見  
通しのない不安な内面的苦痛の日々だったと思う。

大戦の終了直後、カナダ政府の勅令があった。

思いもよらない、厳しいものだった。  
「戦前、西海岸周辺に土地建物を所有していた者は、  
そこに帰るべからず。」

私の親たちは借金をし、土地を開墾し、何年もかけてやっと農産物を生産しはじめ、借金の返済が終わったばかり。その土地を取り上げられたのも同然だった。

さらに、一年内に収容所の閉鎖が決まった。政府は二つの条件を出し、どちらか一つを選ぶべしと命じた。

1. カナダの中部、あるいは東部に移住する
2. 日本に、引揚者として帰国する

カナダ政府が出した二つの条件は、どちらも、保障なき先の見えないものだった。

両親は日本行きを選んだ。

終戦から一年後、昭和 21 年 8 月、バンクーバー港から日本への最終引揚船「ひかわ丸」に乗り込み、見た事もない親の母国へ、約二週間の太平洋航海が始まった。

最初の二日間は天候が悪く、波が高かった。私を含めたほとんどの人が“船酔いゲーゲー合唱団”に加わった。食事できず、睡眠もままならず、只々ゲーゲー合唱を続け、異様な香りに包まれながら、揺れに任せて時間が経っていったのである。

強制収容所はカナダとアメリカにたくさんあった。場所も待遇もさまざまだったと聞いた。確かに、そこは大変だった。しかし、戦争勃発から収容所に入るまで、そして終戦から数年間の辛さは、すべての面においても、比較できるものではなかった。

## ➤ 苦痛はあっても、望みはなかった時代

救われないまま、敗戦直後から両親の母国である日本、山口県の田舎に移住し、11年間を過ごすことになった。

敗戦後とはいえ、まだ「鬼畜米英」という響きが色濃く残っていた時代。敵国から来、また言葉もわからなかったこともあり、学校では「ヤンキー」とののしられた。靴を履き、髪を伸ばしているだけで、いじめの格好の標的とされた。

子どもは時に、無邪気なまでの残酷さを見せつけることがある。思春期を迎えたばかりの柔らかい心に、そうした体験は言葉にならないほどの苦痛となつてのしかかってきた。死にたいと幾度も思った。情緒的、精神的苦痛に耐えるのみだった。

もしすでに救われていたら…、もし神さまの約束であるみことばをしっかりと教えてもらっていたならば、状況は変わらなくても、きっと心の支えとして、強められていたのではないか、そう思えてならない。



## ➤ 野球と英語が救いだつた …しかし、心(魂)の救いはなかつた時代

日本語という大きなハンディーはあつたが、中高生時代は野球と英語が得意だつたことで、生活が一変した。同学年だけでなく、上級生とも下級生ともよい交流ができ、しっかりしたよい仲間恵まれ、明朗快活に過ごした。家庭生活はすごく貧乏で苦しかったけれど、両親と妹の4人家族、すごく幸せだつた。

しかし、一人になった時に心のむなしさを覚えることが多くなってきた。何のために生きているのか…、死後の不安もあつた。外面はいつも明るく振舞っていたが、内面は心のむなしさのゆえに非常に暗かつた。

高校3年の夏、その思いが頂点に達した。

難病にかかり、生きがいであつた野球を禁じられた。家でも役立たず、先が真っ暗になり、幾度も死を考えた。今では、神さまの愛とあわれみのゆえに、思いとどまらせてくださつたと信じている。

やがて難病が癒され、高校を無事卒業した。しかし、心のむなしさと死後の不安の解決は見つからず、農業の将来性も見えなくなって、すべてをあきらめかけていた。その時、不思議な方法で自分の母国カナダへ帰る道が開かれた。

20歳を過ぎ、人生の道を選択するとき、日本を離れることを決意したのである。

1957年、カナダのマッシュルーム農場と雇用契約を  
交わし、横浜港から出帆する船上で「二度とこの国の  
地は踏まない！」と“さよなら宣言”をしたのだった。

## ➤ 霊的誕生

カナダのオンタリオ州にある農場には、和歌山県の  
アメリカ村からたくさんの日本の青年が出稼ぎに行き、  
集団生活を営んでいた。そんな彼らに伝道するために、  
日系二世の若い伝道者夫婦が信徒宅で集会を開いて  
いた。

この夫妻の熱心な友情、愛情、分かりやすい福音伝  
道などの働きかけで、カナダについてから2週間後  
には教会に通うようになった。その献身的な働きに少な  
からず心を動かされた。しかし、信仰を受け入れるに  
は至らなかった。「もっと努力して、よい人間になっ  
てからクリスチャンになろう」と思っていた。

ところがある時、トロント郊外で開かれたファミリー・  
キャンプに参加した。この時、すべてが変わった。最後  
の晩、招きのメッセージを語る宣教師の言葉に、「自分  
が罪人であること、そしてイエス・キリストの十字架に  
よるあがないを信じ、受け入れる以外に自分が救わ  
れる道はない」ということがはっきりと示された。

1957年8月9日、この日が私の霊的誕生日。

## ➤ 新しい出発

ハレルヤ！ フレッド・田中は救われた。神の子どもとして成長するスタートラインに立った。新しい人生の出発だ。心のむなしさが満たされ、死に対する不安がなくなり、勝利が与えられた。

あなたは“不可能と思われることが可能になる”と信じるだろうか。神さまは人の思いをはるかに超えて、私の人生に介入してくださった。

救われてすぐに持ちかけられたのは、サスカチュワン州にある聖書学院への入学の話だった。渡航費用の借金に加え、農場と交わした3年間の雇用契約があったので、到底不可能なことに思えた。

その翌日のこと。数人がかりでベルトコンベヤーを持ち上げようとした瞬間、つかんでいた手が滑り、手の指の爪先を切断。足の甲にも激しい内出血を伴う大けがだった。結局、3週間の入院生活を余儀なくされ、病室のベッドの上で聖書を読みふけた。「退院しても、農場ではすぐには働けない…」と思った。

借金と雇用契約。そのことが脳裏をかすめたが、軽い気持ちで聖書学院に入学願書を送付してみた。数日後、聖書学院から届いた封書には、「授業は始まっている。すぐに来てください」とあった。

退院の日、不安を抱えながら農場に戻った私を待っていたのは、知人の車に便乗して、同州に行く話だった。しかも出発はその翌日。まだ農場経営者に話さえていない。意を決し、無理を承知で経営者に話してみた。帰ってきた答えは「いいんじゃない！」だった。

こうして聖書を学ぶ道が開かれた。学費や借金の問題も、思いもよらない方法で解決した。最初の一年間の学費は匿名の献金が与えられ、残りの学費と借金は、同じ額の労災保険が下りたのだ。

まるで道なきところに道が切り開かれていくように、次々と問題が解決されていく中で、神にしたがう者に与えられる恵みの大きさを教えられた。

## ➤ 児童伝道への召命

聖書学院を卒業した年の夏、オンタリオ州で毎夏行われていたCEFの夏期宣教師プログラムに参加した。

CEFスタッフによる2週間の住込み特訓を受けた直後、8週間の実践を伴うプログラムだった。さんび、祈り、宣教物語、暗唱聖句、聖書レッスン、個人カウンセリングの1時間プログラムをして、次の場所に移動。この5日間子ども会(月~金)を毎日4か所、ひとりで行った。土曜日は、別の町に移動。日曜日はホームステイの家族が通う教会であかしをし、CS奉仕をした。

大変な厳しさと喜びを体験した貴重な夏だった。ひとりで、33 か所の子ども会、8 週間で聖書のお話(レッスン)だけでも 165 回、400 人以上の子どもたちに出会い、救いのカウンセリングをしたのだ。場所は、家の芝生、車庫、公園、学校の校庭、空き地、山の丸太の上など、さまざまな所で行った。

さまざまな環境に置かれた子どもたちと直接触れ合った。それぞれに必要なを抱え、何よりも真実な愛を求める子どもたちの表情に毎日取り囲まれた。とりわけ、母親を亡くしたばかりの三人兄妹との出会いは大きかった。親を失った悲しみの中で、ただ一人、まだイエスさまを知らない幼い弟のために熱心に祈る兄妹が、子ども会を通して幼い弟がイエスさまを信じた途端に見せた喜びにあふれた姿、私を見上げたその6つの輝いていた青い目は、今でも私の心に焼き付いている。

その後、ミシガン州の児童伝道学院に入学。将来の働き場を求めている頃、親しくしていた神学生から「フレッドは日本に行くんだろう」と言われ続けていた。しかし、私にとって日本は考えたくもない国。

そんなある日、湖のほとりを歩いていた私の目に映ったのは、大きな船の甲板に風になびく日の丸の旗。その旗を眺めながら、「日本に行くことが神のみこころなのか」と何度も自問自答した。日本語を話すことができ、児童伝道にも使命を感じている…。私の心の中で「日本」と「子ども」が結び合わされた。

## ➤ 日本CEFでの働きをふりかえって

1963年9月、CEFの宣教師として再び日本の土を踏んだ。1966年3月、ジェインと結婚、二人三脚で児童伝道一筋、宣教に取り組んでいる。

### 直接児童伝道

光の子会(GNC)

特別伝道集会

小学生キャンプ

英語クラス伝道(ジェイン)

### 教師訓練

児童伝道学院

春の2週間コース

GNC教師訓練会(毎週)

教会主催CS教師訓練会

TCE

### 印刷

オフセット印刷機や輪転機など様々な機械、機種を使い45年間印刷を担当

### その他

組織管理、運営管理、会計

総主事代行(10年)

CEF代表(28年、現在に至る)。

## ➤ 確信と願い

長年、子どもたちに福音を語り続けてきて、すべての子どもに共通している重大な二つのことが明白にされた。

- ① 小さな子どもであっても、たとえ教会学校(CS)に行っている、クリスチャンホームにいても、イエス・キリストの福音を聞いて信じなければ、やがて永遠の滅びに行ってしまう
- ② 福音を彼らにわかるように、はっきり伝えたならば、御霊の働きによって、イエスさまを自分の救い主として、素直に信じ、救われることができる

児童伝道は、天の父のみこころ(マタイ 18:14)であると確信した。私は 24 歳の時に、天の神さまの大きな愛とあわれみによって、やっと救われた。しかし子どもは必ず大人になるとは限らない。今、救われる必要があるのだ。ただ一回の出会いが、唯一の救いの機会になることがある。私の子ども時代の体験をさせてはならない。

**「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。  
止めてはいけません。…」(マルコ 10:14)**

どうか祈ってほしい。健康が守られ、なるべく長く、役に立つ限り、主の御用が続けられるように。

